



投げられたところで起きる小法師かな

校長 矢島 誠

誰もが、だるま（達磨）のことはよくご存じだと思います。

仏教の一派である禅宗開祖の達磨の座禅姿を模した置物です。現在では、禅宗のみならず宗教、宗派を超えて「縁起物」として広く親しまれ、多くは、赤色の張子（はりこ）で製作されています。近郊では、群馬県高崎市が生産地として知られ、購入時に左目（正面から向かって右側）に目を入れ、願い事がかなったときに、右目を書き入れる習慣があります。

私は、だるま（達磨）という、「私の人生そのもの」とこれまで思ってきました。これまで、失敗だらけの人生で、「手も足もでない」だるま（達磨）さん状態を繰り返してきたからです。そのせいか、大変親しみのある置物として、毎年正月に購入しています。

最近、このだるま（達磨）に関わる一つの句と出会いました。

『投げられたところで起きる小法師かな』というものです。起きあがり小法師、つまり達磨さんがポンと放り投げられた。その場所が泥んこの中であろうが、ごみための中であろうが、「私はこんなところは嫌だ。絹の布団の上でなけりゃ嫌だ」と文句を言わない。いつどんな所へ放り出されても、無条件にそこをわが住み家、わが正念場と腰をすえて受けて立たなければならない、ということだそうです。

私はこれまで、ああしたい、こうしたい、あれでは嫌だ、これでは嫌だと取捨選択し生きてきました。気まぐれで自分勝手な私の思いを先として、気に入ったことはとことん追いかけ、気に入らないことからとことん逃げ、あるいは誰かが助けてくれないかとキョロキョロ周りを見渡したり、背比べしてよいといい気になって高慢になり、悪いと劣等感に陥り、立ち上がることさえできなくなってしまふなど、いつでも自分自身の姿勢がくずれたままの状態でした。

追わず逃げず、くずれず、背比べせず、助けを求めず、今ここでいかなる条件の中にあっても文句なしに姿勢を正して立ち向かう。この生き方の確立こそが大切ではないかと考えています。

令和3年がいよいよ始まりました。改めて、新年あけましておめでとうございます。令和2年度の9か月間は、コロナウイルス感染症対策から、279名の児童生徒の学校生活は決して有意義なものではなかったと感じています。この状況が改善される見通しは全くなく、児童生徒、保護者の皆様にはご迷惑をおかけすることが続くと考えています。大変な学校運営となりますが、保護者の皆様のご理解、ご協力のもと教職員一同一生懸命頑張っておりますので、宜しくお願いします。